

横尾山施福寺

古くは横尾山寺と呼ばれた山岳寺院で、縁起では欽明天皇の時代に播磨国の行満上人が創建したとされている。本尊は千手観音で、西国三十三所第4番札所。



コース 8 鍋谷峠・横尾山

大化の改新後に発布された詔では畿内の南限は兄(背)山にありました。当時の都、難波京から鍋谷峠を越える道は背山に通じています。JR笠田駅からバスで四郷バス停まで移動、鍋谷峠を越えて父鬼バス停までの南海道(国道480号)を歩きます。
また、修験者・巡礼の道である横尾山施福寺に至る尾根沿いの道を別コースとして紹介しています。



バスのご案内

本コースの出発・到着地点(バス停)のアクセスについては路線バスをご利用いただけます。運行数が少ないので、事前に時刻表を確かめてください。

- JR笠田駅
 - ↓
 - 四郷バス停 1日3便
 - TEL: 0736-75-2151 (かつらぎ町コミュニティバス)
- 父鬼バス停
 - ↓
 - 横尾山口バス停
 - ↓
 - JR和泉府中駅 1日4便
- 横尾山口
 - ↓
 - 南海泉中央駅
 - ↓
 - 南海泉大津駅 1時間に1便
- JR和泉府中駅
 - ↓
 - 和泉中央駅
 - ↓
 - 横尾中学校
 - ↓
 - 横尾山口バス停 1日4便
 - TEL: 0725-56-3931 (南海バス光明池営業所)
- 横尾中学校前バス停から横尾山登山口までシャトルバスの運行もあります。平日1日4便

七大龍王社

七越峠の東、対空路監視レーダーの右側に「童子の社」の祠が残されている。谷へ少し下ると静寂な檜林の中に龍王社が鎮座している。江戸時代に地元神野村を中心に祭祀されてきた。



鍋谷峠

経塚山(標高809m)の南西に位置し、古くから紀伊国と和泉国の境界で、和泉国側では冬に積雪が道を難渋させている。



大宮神社

かつらぎ町広口の穴伏川右岸にある。社伝では、雄略天皇の代に創建されたという。急な階段を上ると社殿があり、隣には神宮寺の大宮寺がある。



堀越禰観音

標高857mの燈明岳の麓、紀の川を見晴らす堀越の里にあり、地元では「堀越の観音さん」と親しまれている。古くから山伏の行所として開かれ、境内のさざんかの老樹は県指定天然記念物。



文蔵の滝

四十八瀬川上流にかかる上下2段からなる滝。滝は崖壁から離れては見る事ができず、滝口のみ眺められる隠れ滝で、一帯は神秘的な景観である。



— ウォークコース
— 南海道
— 灌漑用水路
■ 万葉故地
■ 道標
■ 城跡
■ 公園・緑地
24 国道
55 県道
R 寺
F 神社
R 駅
● 見どころ
X 学校

京奈和道路
 紀北かつらぎIC



難波京からの南海道

7世紀半ばに充実した国家体制を整えた唐が朝鮮半島にあった高句麗への侵攻を始めると、周辺諸国では中央集権国家体制の確立と国内統一の必要に迫られることになりました。そのころ倭(日本)では、蘇我入鹿が厩戸王(聖徳太子)の子の山背大兄王を滅ぼして権力集中をはかりましたが、中大兄皇子は蘇我倉山田石川麻呂や中臣鎌足の協力を得て、王族中心の中央集権をめざし、大化元年(645)に蘇我蝦夷・入鹿を滅ぼしました。(これを乙巳の変と呼びます。)

そして皇極天皇の譲位を受けて王族の軽皇子が即位して孝徳天皇となり、大王宮を飛鳥から難波に移して政治改革が進められました。孝徳天皇の時代(在位645～654年)の諸改革は大化の改新といわれています。

乙巳の変の翌年正月に改新の詔が出され、その第2条に「畿内国司を置くこと」が定められています。畿内とは、律令制で定められた地方制度上の特別地域を指し、国家が直接支配する地域として特殊な位置づけにあり、律令制度では、大和・摂津・河内・山背の4国(後に和泉の国が分置されてからは5国)が畿内とされました。改新の詔に見える畿内ではまだ国の境界が定まっていなかったようで、その範囲を次のように記しています。

「畿内は東は名壘(なばり)の横河(三重県名張市)より以来、南は紀伊の兄山より以来、西は赤石の櫛淵(兵庫県明石市)より以来、北は近江の狭々波の合坂山(滋賀県大津市)より以来を畿内国とする」

詔は難波京で発布されたもので、難波からの道と考えた時、南の兄山は難波京からの道路を目印に設定されたものと考えられます。その道路は難波京から南へ難波大道を進み、のちの日部駅(堺市草部)から直線指向で南に向かい和泉市国分町から岸和田市父鬼町を通過して鍋谷峠を越え、紀伊国に入ったのでしょう。それが当時の官道(まだ南海道の名称はなく、建設には至っていないと考えられます)であり、それが南は紀伊兄山と規定された畿内の範囲とされたのでしょう。

その後、天武天皇12年(683)前後と聖武天皇の天平16年(744)に短期間ですが難波京は都として機能しています。その時の南海道は難波京から洪川道を経て河内国府(藤井寺市)に至り、そこから東高野街道を南に向かい、紀見峠を経て紀伊国では紀の川の北岸、平城京から通じていた南海道を使用していたと考えられます。

修験の道

修験の峰 葛城山.....
奈良時代に役行者(役小角)によって開かれたといわれる葛城の大峰は、修験の行場として最も畏敬された山であり、全国の山伏にとって一度は入峰すべき山でした。

平安時代になり修験道は全国の峰に発展してきました。

葛城の峰とは犬鳴山七宝瀧寺の智航上人が嘉永2年(1949)に書かれた『葛嶺雜記』にも「惣じて紀泉河大の四か国に跨りて行程二十八里の総名」と記されています。今の和泉・金剛の両山脈はすべて葛城山と呼んでいたのです。その主峰金剛山(標高1125m)も、もとは「葛木山」と呼び、山頂には葛木坐神社が祀られています。

葛城山と役行者

修験道とは原始的の山岳信仰と仏教の密教的要素があわされた宗教と説かれています。その創始は白鳳時代の役行者(役小角。生没年不詳)です。役行者は、葛木山で修業し、呪術者として鬼神を使う能力があったが、弟子に讒言されて文武天皇3年(699)に伊豆の国に流されました。しかし、2年後には赦免されのちには、賀茂の姓を賜っています。平安時代の書物では仏法を敬い晩年には修業によって孔雀の呪法を体得したと記されています。

やがて金剛山転法輪寺と山上ヶ岳の金峯山が隆盛となり、平安時代に藤原道長は山上ヶ岳の山頂に経筒を埋納しました。その頃から大峰・葛城の峰を巡行し行所を勤行する姿が見られるようになったようです。

葛城二十八品の経塚

役行者は、葛城の峰を仏法の世界と見て、法華経八巻二十八品をそれぞれ経塚に入れて埋納しました。この二十八品の経塚は友ヶ島の序品屈に始まり、葛城の峰を西から東へ埋納し、第二十八品は大和川の亀ノ瀬の経塚に終わるものです。榎尾山施福寺は二十八品の埋納の最後に収めたので「巻尾山」の山号になったと伝えられています。我が国の経塚埋納は平安時代末に盛んになりました。それは、釈迦入滅から仏法でいう56億7千万年後に弥勒菩薩として生まれ変わり、我々を救ってくれるがそれまで大乘仏教の経典を経塚に埋納しておこうとするものです。野辺の地藏さんは、弥勒菩薩が出現するまで釈迦如来に代わりて我々を救う尊像として信仰されてきました。

実際の経塚は一様ではなく、自然石・石祠・五輪塔・石畳・印之松・切立塔・法輪形など様々で、自然石や石祠などにはバク(釈迦如来)・カーンマン(不動明王)などの種子が刻まれている場合が多いです。

修験者はこの経塚に勤行し、その証として祈願文と年月日、修験派名を記した木札を奉納します。この木札を「碑伝」と呼び、葛城の経塚や行所にはそれぞれの修験派を記した碑伝が置かれています。奈良・平安時代に紀の川北岸を南海道が整備された頃和泉山脈の山中を東西に結ぶ修験者の道が通り、紀泉国境を南北に通じていた道路が接する峠では人々の交流もありました。



榎尾山への道